本間精一郎事歴

国立公文書館
分類 雑-283/
排架番号 3 A 43
雑 ~~2797~~

0000 0860

国立公文書館
National Archives of Japan

本間精一郎君系

(一) 本間精一郎傳　齋藤文哉撰

(二) 本間正高傳　岡鹿門撰

(三) 本間至誠傳　松林飯山撰　付榎本正隆跋文

(四) 桑本間精一郎君文　日柳燕石

(五) 北海烈士行　高橋竹之介

(六) 東久世伯爵書翰

(七) 谷子爵書翰

(八) 川路寛堂手記

(九) 樺山三圓日記　佳史茨會調書

(十) 伊藤公爵傳記一節

(十一) 耶須宣氏書翰一節

0000 086

国立公文書館
National Archives of Japan

(十一) 三條公書
(十二) 高杉東行手録
(十三) 宮武間周旋始末（毛利公爵家記録所）付土屋矢壽、久保玄瑞日記
(十四) 北畠男爵書翰 付平岡次郎中大人履歴
(十五) 與樺山三圓書
(十六) 與藤井良節書 付史談會謝書
(十七) 與大橋順藏書

本間氏の先世は佐渡國守護職たり承應二年（距大正七年二百六十五年）本間遠江守正方の孫玄如來りて寺泊に住し領守松平大和守給するに宅地廩米を以てし四萬石浦々の「沖の口改帰役」を命ず之を寺泊に於ける本間家の祖先と為す世々其職を襲ぎ又大庄屋所役人と為り傳へて今に至る

本間正高字は至誠、不自欺齋と號し精一郎と稱す又通称右衛門といい其家は本間家三代の主、源左衛門（余）の四男源次右衛門を分家したるものにして（因）精一郎は天保五年に生れ人となり豪毅闊達、幼にして齋藤赤城の門に遊び漢學を修むること六年夙に憂國の志厚く嘉永六年米艦の浦賀に入るや齢僅に

殉国憤慨に禁ぶ

くもりなき真澄の月の心もて
あはれ雪井に名を照さばや

の一首を壁上に題し單身長剣に仗りて江戸に脱し
川路聖謨に仕へ後屢々京攝の間を往來し又四國
長州に赴き勤王討幕の議を唱へ文久二年閏八月
三十日京師に暗殺せらる、時年二十九齋藤文哉、岡
鹿門、松林飯山等の撰へる傳記あり甚だ詳悉
を極む

(一) 本間精一郎傳

齋藤木文哉
父歸赤城

本間精一郎、諱正高、字至誠、號不自欺齋、精一郎其通稱世
為佐渡守護職、承應二年、有本間玄沼者、始移寺泊、領主松平
大和、給以廩米、命四萬石之沖口改役、三世至源左衛門、源左使
其第四子源次右衛門、別營一家、源次生辻右衛門精一郎、即
辻右長子、資性豪放、少小既不事家人生產、辻右奇求師不
得、偶齋藤赤城、新自江戸歸、垂帷授徒、赤城佐藤一齋
晚年弟子、其學亦本主氏、以當世之務為急、乃就而學、精
一郎、伏讀書六年、嘗繙春秋左氏傳、至王及之句、問曰、周室
雖微、天下之宗主也、今呼之以及、不亦盭乎、赤城曰、善哉問、
是非外國千年之史譚、正我邦眼前之當事、況頃又聞
皇上待宵之說乎、方今幕府專恣、其奉　皇室、朝減其進御、
暮削其食膳、是以、晝則濁醪、肴則待宵以自甘、待宵何、
皇上、一夜隱憂不寢、如有醪而無肴何、因竊照燭得廚人殘

體之皮而甚飽、自時其後、名曰待宵、古歌曰、高津與飛爾、不計由久加祢能、古意喜鶏娶、安閑努和閑禮能、登利者毛乃閑者、蓋其喜厥諸末句、其名厥諸初句、夫桓公生兵革之世、一匡天下、賴朝乘式微之餘、糾合諸侯、其功雖偉乎、私天下兵食之權一也、故其踏而襲者、嗚呼王以反、則朝臧暮刑、是所謂三綱淪而九法斁者矣、二三子平生、誦讀靖獻遺言、新論宏為有今日矣、是可忍也、孰不可忍也、何為莫出、精一郎涕泣扼腕久之、既又自奮曰、小子請出游、赤城曰、其行行焉、其侃侃焉、正高有子路之勇、兼之以子貢之辨、其或可乃許、

（已下畧）

一本間先生を江戸の人若くは幕府の間諜と思ひし者

二本間先生を草莽血氣の壮士と思へる者

右二者の見は盡く誤なる事は本間先生御出御迫の経歴を序せされば分り不申ゆ然るに既に其御在塾中の経過に徴するも其學問に根拠ある事此の如し其討幕を以て志を決せられし事此の如し洵に然らは別紙を以て本間先生金傳の冒頭となさば世の百攻萬撃も聊も起る可き懸念も無く贈位の如きは誠に易々たるものと存ぜられ申ゆ

木

（二）本間正高傳

岡　鹿門

余曾謂、維新大業成、水戸藩長三藩之力、而其死執大義奔走四方、就湯鑊罹刀鋸、使天下明知幕府蔑朝威之

罪、翕然奮起勤王義氣者、浮浪之力居多焉、若本間正高其一也、正高字至誠、號不自欺齋、稱精一郎、又曰辻右衛門、越後寺泊人、病僻鄉之良師、亡命來江戸、此時米國要請貿易、幕府假訂條約、堀田閣老入朝奏狀、正高屬川路司農、西上、薩摩、日下伊三治亦從之、正高兄事之、伊三治坐水戸藩事、下獄、正高時客上総齋藤氏、聞此事、憤然曰、幕吏虐志士一至此、乃西上、與同志從論時事、幕吏物色、乃遊赴前、見小倉健作、健作長藩士、正高嘗與之師事良齋安積先生、俱慷慨論事、為藩人所耳目、逮至伏見、下獄、既而放免、是時前太政大臣三條公為傳奏、以先内府實萬卿故為天下論事者之所仰、正高私出入門下、往來京攝之間、與薩長諸藩及四方浪徒、互通聲息、余以辛酉歲游京攝、見正高於松林飯山座、腰佩長刀、容貌魁偉、痛論幕府逆跡、余壯之、與之訂交、是歲余與飯山及松本奎堂、借奎島水亭、同寓、奎堂嘗與梅田賴諸氏謀事、黨獄之興、僅以身免、飯山亂剛老壯、慨然以功名自期、二人與正高相得、余略涉海外之事、不服人所論、曰錄府以後爭亂相繼、朝綱墜地、此國體之不可不復者、唯我無大艦巨砲、足以抗彼、一朝開釁、殆以金甌國體為孤注者、正高曰、海防議起廿年于今、幕府際此危急、其所為、築得一品川砲臺而已、且大平三百年、上自朝紳、下至列藩、無一人傑足以寄國家大事者、今日之事、有置勝敗于度外、與彼一戰、陷金國於死地而已、如此則草莽志士、應運崛起、必有奉優獻策為中興元勲如錄足公者、起千人奴、統一天下、為關白如豐太閤者、而後與彼交際、則和戰之權在我、開鎖唯我所

故、況聖上以攘夷大義、誓諸天地鬼神、吾曹際此時、豈可傍
觀天下之事乎、奎堂飯山在旁曰、古來豪傑乘風雲策功者、
皆草間書生、時勢至此、盡策所以効力於此耶、四人相顧大笑、
翌年正月、浮浪刺安藤閣老、不中、正高曰、余固知有此事、蓋
與聞其謀也、此時清川八郎稱兼青蓮院宮貢、游鎮西、真木
平野諸氏應之、正高知謀、一夜蒼皇來敲曰、幕吏物色、若少遲々
則悔無復及、余與奎堂飯山作書嘱日柳燕石曰、渠俠客可以
托危急也、後一月燕石伴来曰、本間君来曰、期三月舉義旗、請
借從児三百人、此時余出游播州、奎堂飯山不敢明告、蓋難明
言也、一夜有敲戸疾呼者、出見則正高也、意氣鬱勃、扼腕曰、吾
自贊岐入土佐、志士響應、將往說肥薩、途接薩侯生父三郎君
東上報、直航長藩、見久阪高杉諸氏、說以不可為薩藩之所

先、諸氏躍然、夜見藩宰益田氏、及覆辨論、益田氏領之、二藩
大兵踵至、此游不負丈夫見所為者、因屈指曰、天下之事不出十
日、此舉浮浪要薩侯於兵庫、薩侯諾為奏事狀、留諸士大反
卯入京、有勅曰、駐輦下、鎮撫浮浪、諸士憤然、正高與同志入
京、當此時、訛言紛起、人々為在兵間之念、余泄聞諸士期是
月十五舉事、乘夜舟泝淀川、抵伏見、寂然無異事、心訝之、
聞正高館三條橋側、往見、坐陳武具、與三壯士箕踞豪飲、問
狀不語、大息曰、誤大機、尋有伏見之變、始知其所謀也、此時
薩長二藩入京、浮浪横議互相冨援、有四奸両嬪之目、正高
與書薩藩藤井良節、痛論壅蔽之害、十三卿連署上奏此事、
久我岩倉千種富小路四卿、得罪禁錮、浮浪之力、隱然動朝
議、正高一日在中山卿第、與壅宕論事、大聲罵曰、方今魑

夷陸梁、幕府不奉朝命、皇上軫念、不安寢食、而公卿柔懦軟弱、惟貨利之貪、酒食之耽、長袖者果不値半文錢、一座相顧失色、一夜醉歸、追三條堤、刺客七八名、要遂正高奮鬪逐為其所斃、梟首三條磧、榜書曰、出入朝貢、構薩長土三藩貪貨賄、間志士、釀成禍害、遂不知誰人所為、或曰、土人所為、此為文久壬戌八月二十日時年二十九、燕石聞此事、設位祭之、文曰、君罪果當殺耶、宣正其名、致其戮、何為昏夜暗賊、推此陰害、生而為義士、死而受惡名、君有罪與否、天下後世必有公評、噫、正高大節如此之烈、而死不得其所、梟不知其罪、大政維新志士、効死王事者、或追祀、或贈位、而無復一人為正高雪其寃、表其烈者矣、今茲辛卯其弟源二、設位天王寺、會義故、祭其靈、且以余知正高於當時、請余撰傳、噫、飯山奎堂前後斃于王事、余以無所為、生存至今日、為正高撰傳、余之責也、因次余所及知、及一二逸事、為之傳、世追考當時者、將有所徵于此篇也、

(三) 本間至誠傳

松林飯山

士之所以為士者、顧志如何耳、他不足論也、其志卓然足以取信于人、而不幸蒙罪名以死、如吾友本間至誠者、君子悲之、至誠名純、稱精一郎、不詳其籍里、自言越後人、狀貌魁偉、好帶長刀、人皆以為劍客也、嘗與余同遊良齋先生之門、不屑攻章句、深痛王室陵替、慨然有勤王之志、及頼三樹等獄起、至誠亦以嫌疑繫京獄者半歲、既得免、而其志益堅、辛酉冬、余在浪華、見至誠於逆旅、至誠慷慨激昂、罵幕府不絶口、市尹聞之、使人伺

察其動靜、至誠勢不能安、遁走讃岐、余作書以諸日柳章、世章博徒之好義者也、去數月矣、中夜忽有敲戶來者、余時病在蓐、驚起見之則至誠也、余且喜且怪、具問其故、曰、吾自讃岐歷主佐、西游肥薩、欲遍訪同志之士、會薩侯生、父三郎寧、兵東上、是以先來耳、因擧手示余曰、事不出十日矣、三郎之入京師也、聲威震動海內、既而其所為頗不滿人意、有下欲先擧事者、至誠等應之、乘夜過江至伏見、而事適不成、至誠等散去、久之有人殺、至誠於京師、榜其罪案、取其首梟之、或曰、為薩人所殺、蓋非其罪也、癸亥春、余以事卦京師、訪藤本鐵石、談及至誠事、曰、至誠嘗至搢紳中山公第、大聲罵曰、方今醜夷陸梁、幕府不奉朝命、皇上軫念、寢不安席、食不甘味、而諸搢紳柔懦軟弱、惟貨財酒色之嗜、長袖者豈直一文錢哉、第中相顧失色、言雖近狂、可以見其志矣、而松本奎堂亦曰、世章聞至誠之死、設位祭之云、鐵石名真金、備前人、賣畫為活、深沈有大節、後與奎堂同事而死

右係吾友松林伯鴻之著作也、讀至末段、湊合有所歸、無遺憾矣、伯鴻大村藩文學、余當時監其學事、而出入相許以肝膽、共盡力國家、故談笑之間、耳本間氏之名久、維新後余秉之新潟縣令、就其士、益得識其行為不凡、伯鴻既逝、余豈可辭之、乃援筆而應其親戚故旧之需云

從三位 勲二等　　楠本正隆

(四) 祭本間精一郎君文

日柳燕石

嗚呼君有罪耶、我未知之也、君無罪耶、我未知之也、然君之所

說、非尊王則攘夷、我以此一見如旧、肺肝是披頃聞下君遇毒手珍
京師上、其事何怪、其禍何奇、嗚呼君有罪乎、青天白日可以
誅戮、何冥々之中行此惨毒、君在泉下豈瞑其目、嗚呼君罪
之有無、天下後世必有公評、我悲其生而入義人之列死而得
罪人名上、妄供薄奠、遥祭君靈、嗚呼哀哉、尚饗、

(五) 北海烈士行　高橋竹之介

彥山嶇崎拔把翼、泊浦渺茫浸天闕、秀氣所鍾不可誣、釀出
北海一丈夫、壯膽如斗眼如日、借問姓某字精一、弱齡破産意氣
多、曾賦雲間明月歌、孤劍周遊滿天下、時務悪知肉食者、城狐
在内狡狼窺、九鼎殆似累卵危、天子頻下痛憤詔、草莽何妨應
宣召、感激不省卧龍岡、直乘風雲遊洛陽、洛陽男児慾鼓
舞風采誰敵人中尤、談笑指麾海西潮、擬下灑東方掃氛妖、造
物忌才自徘徊、將奈有賊闖其隙、四條橋上帰來天、月暗風冷
夜閒然、雲鴻誤落網羅裏、遺恨空葬鴨川水、竊聞今上英武
復聖明、侍臣傳來奏九閽、五雲惨澹紫震殿、龍顔掉涙手草
傳嗟哉人生誰不為、北印塵、俾名独照千古春、身後榮華無窮
福、枉寃九死豈足哭、精一郎、精一郎、黄泉之下可瞑目」

(六) 東久世伯爵の書翰

御安金珍重に存候陳者故本間精一郎当年五十回相當に
付事蹟編纂被成候に付御手寄市座候條仲
一拙者方、成年にも有之候哉年月日は慥に記臆不致候得共
両三度入来勤王之旨趣唱導之義面會致候而婁々兼候事

年月日は覓居不申候得共拙者隣家に豊岡隨資卿と申國
事係一人にて其子息健資朝臣方へ會津藩より馬を牽來り
警古致候事有之本間氏周旋之様子見受申居候會津藩に
薩長離間なぞの流言御座候事全く會津之入込故と存候
條公其他勤王公家方へ御出入被致候事は可有之と存候得共
慥に誰家と申事兼知不致候本人の容貌言語等は身体斜偉
強壮にして衣服も頗る流なるを粧い言論流暢にして咳唾成珠と申
（き）辯舌者と存居申候
委細申述度存候得共四十餘年の昔日餘り親敷は不仕候而三
度之辯論而已に御座候間荒涼たる事蹟御参考に相成兼候
かとも存候得共如此御座候 敬具
（四十四年） 四月十六日 東久世通禧

本間健四郎殿

（七） 谷子爵の書翰

六月廿七日御認の貴墨拝見いたし候御同姓本間精一郎氏横死
の儀には御尋被の旨敬承いたし候當時野夫も在京中薩
州の留守居本多彌右門方にて御目當り御議論も承り候如貴
諭文久三年の頃四國九州等奔走いたされ尊王の大義を夜唱
之れが為憤発興起せし者も不鮮と被察候当時各藩の脱走者
夥敷京師に入込薄かに而も自分の意見と異り候は奸賊の名を
付け殺害いたし此際純粋の勤王家にして誤て光徒の手に倒れ候
もの亦盖し不少と被存候御同姓も亦其類に非さる欤左れども野
夫に於ても僅々一面度の面會にて平生の御持論を確め候丈の親

交ル無く四十余年後の今日に於て立證可致材料とては無之候氏は容貌偉大頗る風采能く常に雄辯を振ひ坐客を壓倒するの勢あり夫れ等の事より同志間に忌み悪まれ奇禍を買ひしに相違すやと推察致候浪士の作りし回訓文に堂上に立入り有志の士讒訴云々の文字有之候得共此等は蓋し党徒の口實と被存候

富時の俗歌に

器量よいとて冠たいぶるな
本間精一郎が首を見よ

此歌位の事実に近かるべーと被存候果して然らば誠に氣の毒千萬と被存候此の外別に思い當る事も無御座候故金井翁(故錦鶏間祇候)にも此の咄致し候事も御座候右御答如此御座候 匆々敬白

七月一日　本間健四郎殿　谷干城

(八) 川路寛堂(川路聖謨の孫)の手記

君は安政元寅年頃より同三年頃まで欧川路聖謨に仕へて其中小姓となりたれり当時君は凡齢廿五六歳なりしか其何人の推薦に依て聖謨の君を採用せしかは知らされど当時有為の人より紹介ありしや必せり中小姓といふは即ち聖謨の側に侍しるものにて即ち現今の寄寓書生の如きものなりき其頃聖謨が故ありて家臣の名称を以て使用し且保護したりし後の薩藩日下伊三治事当時宮崎復太郎と仮称したるもの歳に十歳なりしが宮崎翁に詩賦を學ひたる故日々翁に接せり然るに一日翁余に告げて

曰く「今度当家に使用されたる本間精一郎は一個の英物なりと信ず
請ふ能く彼れを遇せよ」と今猶其語余の耳に在るの感あり日下
の宮崎は後年安政の大獄に連り獄中に卒せし有名なる勤王家の
一人なり又本間君を見たるの眼識ありしとゝふへきか他年精一郎君は
土佐藩に聘せられ京に在て國事に盡しゝが終に暗撃に遭へりと
聞く精一郎君の容貌は稍方面にして色白く丈高く言語明爽
眼光人を射るの様ありし君は又書を能くし最も隷體に巧みなりし
惜むらくは一葉も君の筆蹟を所持せざりしを

明治四十三年十一月　　川路寛堂手記

(九)　樺山三圓日記

薩藩士樺山信秀旧名樺山三圓は嘉永年間より江戸に出て
弘く諸藩士其他有志の士と交り國事に尽力せし人物なり文
久元年十月三圓江戸より帰途京都に滞在し十月十日三圓同
藩士鵜木孫兵衛なる者方に来りしに本間氏来訪初めて面会
せしの記事あり　（史談會）

十日　雨（前略）先刻鵜木所へ差越居候處此内兼居候本間精
一郎と申方被参初めて逢候日下（伊三治をいふ）之知人にて今晩も被
参候（三圓十月十日入京四條大文字屋止宿とあり）
十三日　晴　四ツ過より本間氏参内にて即所より下加茂に参り紀川
之辺にて遊ぶ加茂川の風景麗しそれより三條摂の料理屋へ行品
々の料理之汁物など出し後々いたし夜五ツ時分に帰り三條通之處
店見いたし賑々敷事ともなり
十七日　大阪に着虎屋に止宿す

国立公文書館
National Archives of Japan

十九日 晴 今日者本間氏被参候滞在被申小生看病を待たれし
よしにて親切の至なり江戸にて別れ候跡後の藩川本東太郎（樊太
郎の事）爰元に尋被来旅宿より逢候夜八ッ過より本間氏の宿に
差越致一宿候
二十日 晴 今朝帰り候（中暑）先年召仕候善太郎旅宿に参り魚
類とも持参り有も不寄事之慶名札を見候為来りし之事に
候いと懇しく酒など出し候本間川本氏にも被参暫々敷候
二十日 晴 本間川本氏来られ四ッ過より城（大阪城を云ふ）見物に差越
帰り候已者椋木氏（元石見津和野藩士なり大橋順蔵氏の門人なり潛と称し今健在なり）旅宿（寄り段
々と酒ども被出候云々夜に入り舟に参候事
（桜椋木氏とも本間氏は同時代の人にて樺山大阪にて面會の
事に見ゆれは必す知音の間ならんと推想す尚貴下より音
問あるも可ならん）（史談會）
二十二日 曇 今朝出帆の程不相分候故本間氏の宿（行終日相話
川本氏も同宿にて愉快なる事共なり夜入候にも頻被留候故
致一宿候
二十三日 晴 今朝舟より迎に遣候にも直に帰り四ッ過より本間川
本氏舟に被参茶舟借入候而天保山に下り見物いたし茶屋（寄
酒など誂候而四ッ入前に舟より帰り夫より新堀の辺りに皆々歩行
いたし舟に様帰り本間川本も被来九ッ時分に宿屋に様被帰候
二十五日 晴 昼時分に明石へ舟繋り候云々
以上樺山三圓日記中ノ抜萃ナリ記事元ヨリ簡一ニシテ國事上
ニ渉ル記事ナキモ本間氏トハ初面會ノ間ニシテ其懇情ノ跡一見
旧知モ若カサルノ跡アリ必ラス其間ニ互ニ平生ノ抱負ヲ吐露シ將来

相約スル所アリシヤ明カナリ乃チ別紙本間氏ヨリ三圓氏ニ贈ラレタル
書牘ヲ見テ当時ノ文會真相ヲ察スルニ足レリ（書牘末ニアリ）
三圓氏ハ安政以降藩用ニテ江戸ニ祇役シ前後數回ノ往復ヲ室
ネ西郷隆盛氏ト倶ニ水戸ノ藤田東湖戸田銀次郎武田耕雲齋等
ニ就キ時事ヲ諮リ萬延元年井伊大老刺殺事件ニハ薩摩人ヲ
代表シテ其議ニ參シタル経歴アル人物ナリ故ニ文久元治ニ亘リテハ
長人木戸孝允伊藤博文周布政之助等ノ諸人物ト交遊シ頻ル
役秋ノ有志ヲ指導シタルナリ然ルニ元治ノ末年ニ及ヒ時運ノ変轉
ニ伴ヒ藩論ノ容レサル所トナリテ世ニ隱レ又國事ニ奔走セス明治時
代ニ時朝官ニ召サレ茨城縣參事等ニ任官セシモ辞官縣知地ニ屏
居シ終ニ志ヲ得スシテ歿ス誠ニ同情スヘキ経歴ノ人物ナリ
（史談會）

（十）伊藤公爵傳記一節
文久二年

土佐ノ吉村寅太郎江戸ノ本間精一郎久留米ノ淵上丹一郎相謀テ萩ヘ
來リ久坂ニ逢ヒ是非此機會ヲ利用シテ共ニ尊攘ノ旗ヲ擧ケ云々

（十一）那須宣民（田中伯爵叔父）書翰ノ一節（狗難録）
文久二年十月七日認

當春本間精一郎橋原ヱ參リ其ノ節ヨリ天下ノ時勢委敷承リ實ニ
私儀云々

（十二）三條公書
皇天皇土眼分明
（京都、林岸造所藏）

0000 0874
国立公文書館
National Archives of Japan

為本間至誠書　藤原實美□□

(十三) 東行遺文（高杉晋作）日記及手録中

文久二年

常人不可忍事則我忍之矣常人可忍事我忍之甚難矣

浪花寓居此節京師寓す越後浪人

本間精一郎

(十四) 宮武間周筵始末（毛利公爵家記録所）

土屋矢之助、久坂玄瑞日記中、本間精一郎関係ノ分、

文久二年正月元日薩藩士樺山三圓書を我藩の周布政之助久坂玄瑞に贈り薩長相結んで事を挙げんことを促す尋て同藩田上藤七

亦萩に来りて松陰門下の士久坂玄瑞と密に謀る所あり其後土藩吉村寅太郎久留米藩真木和田大助江戸の人本間精一郎等相踵て来り久坂玄瑞土屋矢之助に接して各其志を言ふ蓋し島津氏上京の機に乗して大に為す所あらんとするなり

土屋矢之助が政府に申報したる筆記は其感合の次第を叙すること頗る詳なり

二月十六日晩刻土佐家中吉村寅太郎と申者来訪小子未識人に小得共兼て賢名兼及候由にて心事談合申度旦同藩武市半平太と申者より久坂玄瑞名宛の書状一通持参玄瑞へも面會致度旨申入候折柄玄瑞居合候故致應接様子相尋候處同人儀は一昨年國事には致議論有司の怨怒に由て罪状は不申立何となく斥逐せられ当時は土伊の境に閑吏となり徒に歳月を過し候得共

胸中存筋も有之候には態々罷出候不去瑣少の儀故政府諸公煩すに及はす貴兄迫申入候とのみ敢不発言小生も亦敢不問明日談判に及ふ可しと約し置候有掛りの酒敵にて一供し其宿所瓦町三笠屋方へ送り届申候十七日七ツ過右様子相尋可申上とね し三笠屋方へ参り吉村を訪ふ處同席に一士人年三十許風俗江戸様にて藤堂家中名張良之助と名乗申候玄瑞とは旧友の由頗る尤子天下の時勢人情を熟知し大段表にて宍戸九郎兵衛君と心安く致候由にて其手跡相示し候因て對話數刻玄瑞士人ル雑居最中深更にも及候故明日午後より小生宅へ参り呉る様相約し玄瑞一同引取り申候右他客有之故吉村の談は不発出候

十八日 七時二人を一酒家に招待す玄瑞不來此日家内に故障有之因て是に招く

右名張と申者藩中人とは不見全く幕下御内の様被思候故強而相尋候處同人直様名刺を出し昨日より假名相唱候始末相咄本姓本間精一郎と申候果して幕下の人の由相分候酒酣談論奥出益々其才氣を覚申候土藩人は黙して不語五ツ時相辞し各其宿所へ帰申候

十九日暁起一士来云拙者は久留米藩牟田大助と申者にて急に得貴意御熟談致度儀有之昨日七ツ時萩看即刻両度迫罷出候處折柄御留守故又々推参仕候と申ル故何欲仏書共持参致ル哉と相尋ル處肥後藩の宮部鼎蔵（此人は小生丑寅年江戸にて熟知のもの）手跡にて本藩某への人名附立之一紙取出し相示し其内玄瑞小生の名前も有之不取敢應酬致候處同人儀年二十七歳と欲申立ル哉如何

にも切迫の模様にて今般同志の者二十人許國元致出奔関東路へ罷越は旨趣は方今天下非常の時節合には慶主君江戸年數も相立國人洶々何卒片時も御帰藩有之様日夜企望致候慶小人満朝の世界故迚も事相決申間敷所詮同志の者中合江戸表へ罷越身命を抛ち諫諍致し是非主君を國元へ助け帰はより外は手段無之と存右之者共出奔為致申は万一事不成はつゞ直様屠腹と覚悟相極申は拙者は後来所置の為残り居候貴藩は殊に御有名君子満廷の様子承り及居は故御同志の方々へ對し折入て御咄申度一儀有之一昨夜赤間関より昼夜早駕籠にて罷出申は尤同志の者四五人は赤間関へ留置國元の懸引手當等申托置は由右の次第餘り突然の様存は乃御忠烈の程は感服は得共此儀は中々不容易の事にて毛頭

御疎畧は有之間敷次第なれ共唯今の件は餘り危計の様相見申は小人の世界は罷御殊に深くは故多人數出奔に相成はては定て捕捉も厳重なるべし前途御用心は得かゝと申論し且玄瑞方へ早々来會致は様申遣は同人又云當今形勢相迫は に付而は各一慶置有之度は既に薩藩なとは餘程奮激正月頃より人材拔擢皆各當其任は拙者儀も両三度薩藩へ往来致過月薩藩小納戸役大久保市蔵と申人京師より昼夜帰り幸藩罷通は故府中駅にて面談致は當廿五日頃には島津和泉千人の勢にて江戸表罷発申は傳聞貴藩公武御周旋一件如何相成は或此儀事体至て重大なる事にて後来の得失人心の向背にも相拘りは故公明の御慶置無之とは迚も事相調はとも不相見當時藩公賢明人戈振蕩殊に貴藩とは御両敬間に候得共

此方被仰合ハハ、全の計ニハ不然して一人の獨力にて陰に御周旋
有之ハハ事体曖昧にて天下の疑念となり事必定なり貴兄
苟も御同意ならは拙者従是直様御同道致右島津和泉に御
面會為致可申間早速御決心可然と申ハ小生云右公武御周
旋の次第は定めて政府にて多少の所置も可有之小生なとへは相協
ハ儀に無之故如何なる次第とも申答難申ハ且藩藩人材寥
々といへとも言語の節は通開致ハ故拙者なと見込の節有之
時は事の疎密に由り危言激論可申一向越職の罪を蒙り
ハ様なる次第は無之故貴公御見込の節も有之ハハ、無御用捨
可被仰聞ハ両人衷情の處申談ハ而ハ公儀に渉り不申ハハ、
右薩州へ犯禁御同道と申には不参ハ同人云棄一身而成天
下事忠莫大焉如何々々と相迫ハ故種々辯解申ハて漸く其

氣勢を殺ス申ハ干時玄瑞ハ在座小生又米藩人に云此節
本間精一郎なる者も来遊有志の士故御面會可然と彼玄
聞其名已久然無急須之事拙者一刻も閑暇無之故閑話は
不相好只々貴藩決心の處兼り度尊王攘夷の儀は上下相貫
キハ哉と相尋ハ故目覚敷事は固より無之ハ得共尊の儀は
知得なり攘は未たし（此事繰々論尽筆不能尽）彼其時甚不平なる顔色にて幾
度も嘆息し折角申談度一儀有之迚々羅出ハ處案外の儀も
有之故此度は空敷帰國可仕ハ乍去尊の儀相分りハは、是
亦後来の所置無市瀚急様にと申置宿所へ引取申ハ継て
玄瑞も去る（中略）其夜玄瑞同道にて三笠屋へ行本間を訪ハ是
より前本間儀余り人材故廟堂諸公へ相對為致ハは、一益
有之と存し彼是周旋中同人出足可致と申ハ故玄瑞と共に今一日

柳留に、共笑て不諾何地に向い何方へ走る哉と相尋に得共亦
不言其内玄瑞辞し去る小生獨り談話中偶然久留米生の事
に及ぶ本間撃膝嘆息して云可惜少年誤りこゝ拙者に今
より米生に面會機策相援可申間其宿所を援吳に探申に
には相待居に慶無間本間帰り來り云米人は先刻他出致し
留守の由申に米人の始末切迫の狀如何にも怪敷何欲心に取留
たる儀無之哉は突然江戸表罷越君王擁帰致に儀も有之間
敷且談中薩藩の事室復申立に始末彼是疑惑の至と存本
間を一叩致に慶同人云君未知乎近日將有事矣果不出吾
平日之所計と申に慶一屬の深念を生し推勘及覆致に慶
其儀は不遠して事成就可致貴藩祖宗以來御忠勤の名家
為外藩先せられ豈遺憾乎雖然尚可及也此飯早々政府へ
御達有之内々御手當所要也と申候云々（下畧）

土屋矢之助は本間吉村牟田等と會話したるも彼等と共に事を
擧くるの意なければ彼等も敢て懷抱を吐露せず然れとも久坂は
正月以來薩藩士と密に交渉する所ありて島津氏上京の趣旨も畧
其概要を領し猶は薩藩の内情を探らんが為め已に同志堀真
五郎を同藩に派遣したる程なれは彼れ三士と會するや意氣相
投合し密に盟約する所ありしなり久坂の手記江月齋日乘二月
十九日の日条に曰く

十九日　晴朝蘭海（土屋の雅号）より人遣しに今御光來と申來る即出
浮に慶土州人吉村先在吉村宿屋罷帰に後にて久留米藩
牟田大助と會す是男は今年廿七歳にて餘程沈實樸毅の
人と相考られに即肥後宮部鳥とより弔使の名を聞て來る者なり

国立公文書館
National Archives of Japan

蘭海の家にて午飯を喫し夫より本間、吉村なとを訪ふ吉村南帰
には送りて金谷掛まて至る是所にて予曰く兄の来予未た見込
之慶し申上不申果て為天下尽力せんとならば少敷談する事あり明
木駅に今夜一宿すへく予明朝参上可仕吉村諾す竟に是迄の
金子屋某と申逆旅に投す明木に参らぬは今夜中尋ぬる事あ
れはなり夫より予亦引返し牟田氏の宿中野屋を尋ね談数刻
蓋其人の慨賞を感ず此度薩州島津和泉千人の供張東上出屋
には大に談合する事ありて余なを堀を薩へ遣せし意を大に合す
是より心腹を一々吐露せり今夜半後吉村を尋ぬる事を約せり
其慶へ蘭海来る竟に一酌を命し予し蘭海し別を告て去る夫より
又本間を訪い別飲す夜四時にも相成ると相考本間に別れ又中
野屋へ行き牟田氏同行にて金子に参り吉村と談す吉村なとも来

月五日までには馬関へ会する事に成ぬ竟両人と離れ家に帰れは
最早八時に相成し明朝より本間、吉村、牟田、皆々引取し事に
御座ゝ是日より周布、麻田、逼塞の事に有之申ゝ

(十五) 北畠男爵の書翰

付手西次郎忠夫履歴

(前書)先生和宮降嫁を以て幕府か萬一の豫備に質とするならん
然るに左右之れに心付かす上に徳川し奉り遂に容し玉へるに至れるは
返すゝ〳〵も痛嘆に堪へすそ云々の桜畧に出んとて此慶彼慶の勤王
有志に説き同志の志を募られき偶大阪玉造の有志者佐々木春夫
方に於て藤邑人伴林光平邂逅之れに伴はれ藤家に来られ茲に初
めて知人となりぬ當時三州苅谷の脱藩士宍戸孫四郎伊藤三蔵寄留
し居てけれは相俱に先生の持論を聞き之れか是非討論日を惜り一

旬日餞桑盧に在り此間余が分族の次男平岡忠夫なる者先生
帰京に随伴し（忠夫は今靖国神社に合祀の栄を得居れり余之れが生存中の履歴を草し上書中既に本間積一郎の憲陶を煩はしと記載置きたり）姑く其
抱膝楼上に寄寓したりき、
先生老平に楼記を嘱し攀へ帰りて扁額にしたゝ誇りて居られしとは忠
夫の話に聞及ぬ今其全文記臆せざれど「抱膝楼の題字下に凡そ百七
八十字もありしが「中に本楼は恰も猛虎の喝によれるが如く時来らば脱然
高踏天下に奮嘯」云々の文句若干を記臆す因に云ふ来書中宮内
省御雛録編纂係に従事せし外崎覓氏が調査に係る土州人武市
半平太の籠中日記の中に先生を害せし人は土佐の岡田某薩摩の田
中某の由見えたりとあるが是は半平太が誤聞を傳記せしものと信ず
何者余甫後四五日を経て上京吉村寅太郎（実名実卿）に會談の次轉た
先生の横死をかこちしに寅太それは氣の毒の至りであつた氏土佐に来れ
る除熊々樵泉の廬を訪ねられて両三日余が家に寄寓せしことある
人なりしが故上京以来ル又屢々尋ね呉れ無心置国事談をしてあ
りしが氏常に青楼に上り金銭を散する湯水の如くなるより連木堂
と同じく幕府の間諜となれるが故にその嫌疑上不得已瓢箪尉子の某
楼に在るを聞き役れに洩らし、大事敵手の耳に入れしかと恐る、所あ
より實は安岡嘉助と俱に至り同人をして呼出さしめ川端に連れ来り
飛弾を初めせしに役れ已に酒氣例の豪語一層高ぶり已に柄に手
をかくるを見て不得已安岡某臂を押へんとする間に抜刀せしかば安
岡短刀にて一刺し余亦真甲より浴びせかけたりと云ひ斯く嫌疑上
錯つて正人を殺害せし事あるべく（中略）右記臆のまゝ若干來問不具

大正元年八月二十七日　八十一翁　北畠治房

本間健四郎兄　足下

靖國神社合祀請願書（北畠男爵手草）

奈良縣平群郡法隆寺村

平岡次郎忠夫

天保十一年五月　日生

（願文略）　履歴ノ概略

忠夫資性剛毅ニシテ國風ノ學ヲ好ミ本居宣長ノ古事記傳ヲ暗記シ年十六伴林光平ニ就テ鋭々勉學ス一時其學友伴林先生ハ和歌ノ宗匠ナリ足下題ヲ得テ出詠添削ヲ乞ハサルハ何ノ故ゾト忠夫曰ク余尤鈍ニシテ讀書ニ忙ハレ其風流韻事ハ素養アッテ後ノ業ナリト忠夫每ニ王室ノ式微ヲ嘆ケヤ久シ先輩皆幕府外交ノ失態ヲ憤リ又天下擾ニ開鎖ノ論沸騰此機ニ乘シ王政復古ノ端ヲ得ント百方盡力セル感化セシヤアリ時ニ安政五年戊午九月閣老間部詮勝上京スルヤ切ニ勤王有志者逮捕ニ着手ス於茲在京ノ同志遁レテ藩邸ニ來リ上島掃部手平岡武夫普門院妙海等ニ使リ潛伏ヲ乞フ者多シ近傍ノ同志相謀リ即チ各所ニ分匿セシム誅後人本間精一郎若狭人厨内大次郎（播磨次郎徒）法隆寺塔中實相院ヲ忠夫ノ名ニ藉リ二人之レト同住セシム一夜忠夫二人ニ向ヒ先生方ノ論ヲ兼ルニ專ラ赤髮毋瞳國人追却スルニアルモノヽ如シ果メ其目的ヲ達シ得可キヤ否僕之ヲ怪ムト精一郎答テ曰ク成敗ハ天ナリ又赤髮攘夷ハ　天皇ノ宿慮御一定ナルコト幕府及ビ諸藩モノ所ナラスヤ即チ此　勅諭アラセ玉フ一郎諄々説諭ス時ニ忠夫立ッテ萬國地圖ヲ取リ來リ見給ヒ此粟散辺土ノ小國ニシテ且海中ニ孤立ス彼等ハ之ニ及シ赤髮毋瞳國ノ大且火輪船及ビ銃砲ノ精アリ弘安ノ蒙古襲來時ニ覆沒ハ今ヤ昔夢ニ屬シ神風又憑ムヿ可ラス内ニ顧ミルニ二百五十餘年ノ太平上下怙恋ニ慣レ幕府

斯ノ如ク外ニ怯懦内ニ驕慢諸藩亦勤王ヲ口ニスルモ其實佐幕ニアルコト鏡ニ懸テ見ルカ如ク如何ニヤト二人此言ヲ耳ニシ大ニ驚キ本間精一郎憤然トシテ曰ク足下ハ誰ニ聞キテ斯ル佐幕開港説ヲ為スカト忠夫毅然微笑ヲ湛ヒ異ム勿レト語ヲ徒キ言ハントスル際深夜訪フ者アリ忠夫立チテ其處ニ行ク之ヲ迎テ本間等ノ室ニ廻入レテ忠夫避ク坐定ルヤ精一郎ノ聲ヲ潜メ今迄此ニ在リシ接待書生ハ布穀(此人名ノ号)ノ同族ト聞キ安心シテアリシカ今夜偶々彼レカ云フ所云々之ヲ詰ラントスル際君ノ来訪ニ接セリ少年トハ云ヒ斯ル人物ト同棲快カラス別居スヘキ所ナキカト先手笑テ曰ク夫ハ彼レ宿志ヲ云フ前提ナル可シ尚克ク聞カレナバ不快及テ快哉トナリヌヘシト再来忠夫カ素志ヲ悉シ世ノ所謂攘夷論ハ覇府滅亡ノ階梯ニ在ルヲ知リ漢學ヲ精一郎ニ武技ヲ大次郎ニ受クルコト半年餘輩下ノ警察漸ク厳ミ諸士立ヶ去リケレバ忠夫其跡ヲ追テ京師ニ入リ精一郎カ僑居ニ寓シ大ニ得ル所アリ居ルコト年餘病ミテ國ニ帰ル文久二年閏八月廿日本間精一郎カ首級四條河原瓢箪厨圖子辺ニ梟セラレアリト聞クヤ乃ヶ上京知友ニ其故ヲ問ヒ轉メ吉村寅太郎ニ逢ヒ其掛札ノ文言真事實ニ及ヒ心ヲ説破シ寛ヲ雪キ當時ノ関係者安岡嘉助等三人相共ニ某寺ニ追福供養シタリト云フ

○此掛札ノ寫ニテリ曰ク「栗田飾殿家来ト肩書ノ下ニ本間精一郎首ナリ此者ハ鼎吹会更申迫モ無之第一盃喝ヲ以テ衆人ヲ惑ハシ其上高貴ノ御廏方ヘ致出入侍辯ヲ以テ薩長土ノ三藩ヲ極々談論致シ有志ノ間ヲ離スノ謀ヲ相巧ミ或ハ非理ノ財寶ヲ貪リ其外難尽筆上ニ此侭ニ差置ルトテハ無限ノ禍害可生ニテ如此令梟首者也
閏八月廿一日

(十六) 精一郎ヨリ樺山三圓ニ與ヘたる書

近況寒威頗凜烈老兄愈御高祥御途中無御別条御帰宅祝賀
因啟以有之奉恭賀候隨テ僕再今御陪臣人物ハ七八人モ得候共何

分萬策齟齬窮困仕候定ニ於老兄モ不如意ノ義ハ多分可有之歟
亦遠察仕候乍併隨分御勉強折角御國産御登之義不延引様
御祈候何本儀ハ日外長州迄差遣候最早此頃ハ帰坂可仕ト存
候併長藩モ格別之義有之間敷且周布氏杯モ殊ニ寄自然可仕
哉ト心配仕候桂氏モ近々帰國之由ニ候扨々若々數事ニ候併愈開
塞仕候上ハ却而憤發ノ端ニモ可相成左候ハヽ兄ヨリ之御廻モノ実所
倚頼候何卒拝別前吳々御談申上候西郷君之義御心配御所置
尤所希候堀忠君ハ如何有之候哉御所置之寄不相成義ニ御座
候ハヽ京阪之中ハ御出張奉冀候僕素ヨリ嘶申上候通固東行之
存寄ニ有之候所此間會藩人ニ打合候義ニ有之ニ付來春ニ相延候
欤不然ハ來月早々入ニハ東行可仕候自然御同志御上洛被下候節ハ
京御守衛三條上東側画工藤本津之助号鐵石御人ニ兎モ角モ御

尋可被下候其中來月中旬頃ニハ伊豫最上藩之有志士壱人上京
可仕約諾ヒ御座候僕自然留守ニ候共例之藤本ニ御面會之上
御尋被下候ハヽ相辨可申候老兄御上京之義ハ決シテ御急不被
下御手元之所精々御骨折萬何ヲ以御自仕可被遊御序之節
日下部氏及御同志中ハ為邦家折角御勉励被下候様御鳳聲所
希候縷々剛後唱匆々敬具

仲冬念有四　精一郎　拝

三圓兄　梧下

二伸時下折角御厭御保攝可被遊候不一

（十七）精一郎ヨリ藤井良節ニ與ヘたる書

一筆啓上仕候殊暑厳敷御座候愛頌御壮健被成御座珍重

奉存候偖此間毎々得面談候通是迄有志者頭ニ君側之諸女女
刎除之事相唱候者既已委詳御兼儀も有之儀右ニハ御同然深
心配仕候既々取押仕候處當節追々六ヶ敷相成何分ニも兼伏
不仕今大政御更張之折柄君側之汚女女未除差置候而ハ上ハ
聖君之御聰明ヲ奉蔽下ハ群臣之赤心ヲ相沮ミ勤もスレハ如何敷迄議
相下折角貴藩杯之御周旋ヨリ近況関東ニ於テも御革政之様御心配
被為在候處今般君州之御所置之如キ天下ノ人心大ニ疑惑ヲ生シ候
御儀ニ御座候右ハ畢竟是迄之女女黨其侭御差置ニ相成候ヨリ之
儀ニテ実ニ奉對天朝室置恐入候御儀ニ御座候第一今般関東ヘ
勅使被為御差立候も女女吏擴斥正義之者登用被遊候叡慮被
為在候處朝廷ニハ女物其侭御差置被遊候而ハ彌奉恐懼之御
儀ニ候内ニハ少將右衛門之両嬪外ニハ久我岩倉千種冨小路其外惣而

十餘之奸物依然罷在候ハ如何之思召候哉不正之廷議ヲハ彼両嬪
久我千冨四姦尤彼之為ニ斡旋被致候痕跡已ニ顕然ニ付有志之者
共々是非々々此度ハ因循不致斬女姦之義擧ニ不及候而ハ不相叶勢力
談候小生も室々尤ニハ相考候ヘ共何分御膝元ニ右様之事出来候而
ハ先般叡慮之御次第も有之深恐宸襟候儀甚恐入候間既々理
解申諭鎮情仕候得共一切聞入不申奉恐宸襟候既ハ深恐入
候得共此侭御差置ニ相成候而ハ兼ニ叡慮不被為立ノミナラス天下
ノ大害ヲ引興シ候ハ必然之事故今日之勢不得止天下之御為右義
擧ニ相及可申旨申張迚も取押之事相叶不申候責而ハ彼久我厳
両嬪三四人御黙ニ相成候ヨリ外他事有之間敷奉存候左候ヘハ
タトヒ死ヲ決候輩ニ候得共元是天下之御為不得止次第ヲ記候
誠亮ニ御座候故其上ハ如何様共取押出來候事ト奉存候実

ニ前々ニモ陳候通有志之議談如何ニモ確當ニテ小生共迚モ内情
ハ同様之事ニテ此節ニ相成候而モ君側掃清不相整次第ニ候得
共無是非事柄ハ覺悟罷在候併是迄折角取押鎮勢仕候
所今更相破候モ甚殘念奉存候間篤テ御談置儀ニ付不敢
歌及内談候何卒不打置御咎場合モ被為在候ハヽ御配情所
願候尚得拜謁可申陳候頓首

七月十八日曉　　精一郎

良節　仁兄　研北

藤井良節後宮内ト称シ薩摩藩ノ有志ナリ文久年間京都
ニ出テ二藩ノ國事周旋方トナリ近衛家附トナリテ内外ノ事ニ預ル
即チ京都ニ於テ本間ト相識リ俱ニ國事ヲ語リシモノト見ユ本
間氏ヨリ藤井ヘ贈ラレシ書面ハ記事ニアルカ如ク世ニ三奸ニ嬪
ハ党獄ニ関スル事柄ニシテ故岩倉具視公等居飾幽囚ヲ迫ル
タルモノニシテ藤井乃チ此書面ヲ文久二年戌七月十八日付近衛公
ハ内覽ニ供シ公モ事捨置カレストシテ數日ノ後ニ斷行アリシ事
柄ナリ

（史談會）

（十八）精一郎ヨリ大橋順藏ニ與ヘタル書　（京都林岸造氏藏）

未得拜眉ハ得共向寒之節尊候高福念御勉勵可有御
座奉祈喜ハ隨而不佞無異京寓ニ徒食奉愧謝ハ備日外河
本氏上京之節ハ萬々御心配且御傳聲之振仔細承知仕ハ得共
當地形勢之義ハ承知御存之通之次第故萬々恐縮甚不仕候
息ハ久坂玄瑞ハ九月廿五六日頃寓居被尋其後一度被訪ハ迚
ニテ周布氏ハ未致面會中ニ両人共本月四日出立國表ヘ被帰

君公は昨廿四日伏水着今日於同所淹留宍戸九郎兵衛殿は後
君公去十八日國表出立未限着不仕に得共両三日之中と奉存に
樺山三圓儀は日下部妻子同船昨廿四日限城出帆
和宮様も愈當廿日に発於大津一日に滞留廿二日同所に発に
下向相成に付安心可被遊に依る不佞儀も殊に寄不遠中に可仕
哉も難斗に可相成は下居之上にて東行仕に得者至て都合も宜敷
に得共総不如意實窮困仕に付賢察是所就ては河本氏儀先
小生に欣小生同道相成哉未相分兼に得共孰近日之中に可致東
行に小生東行若相延に得者河本氏に高可托置に間同人より
聞取所希に両藩同業之者共も御著述出板之儀は彼是心配は
仕居に様相見に得共何分微力且銀主も不相付事と奉存に第一
孰も決心之所未確と不相付様にも確に得兼者とても右等之所頼
居因循致居にてい由著述に出板之儀無且東奉存に間此上は
手元と原尼子とにて斟然に上櫻被遊に様奉冀に性今には當
方同業之者も無之に得共尤不及小生自仕に相談に相如可申に
間疇金之義に差急被下に様實所所に公辺に願濟に上木
に相成共上は備　天覧に位之事は如何様にも此方にて孰斗可申
上に未得拜に得共近日近衛家にも目に通可仕積に座に間其辺
之處吳々も心配不被下様致度に先は異日の御酬且近況御手元之
御様子御窺申上度如此他雑罄筆底　匆々頓首

十月念五　　本間精一郎拝

大橋順蔵様　侍史

・二伸河本氏より尊申上吳に様申聞に折角御自重時下隨分
御厭被遊可被下に　不一

本間精一郎は我が分系の出にして先考本間源左ヱ門（十世）の従弟なり明治年間縣和事より贈位奏請の事を其筋に稟請せるも事蹟明確ならざるの故を以て死後五十有六年を経たる今日に迫ぶも未だ恩典に浴するを得ず大正五年五月北畠男爵（大和法隆寺村）事を以て上京、月の廿五日、余、男に面して精一郎の事を問ふ、男、當時の状況を語る頗る詳かなり又其親友たる分族手岡忠夫が彼れの薫陶を受けたりその故を以て首相大隈伯に親しく彼れの経歴と當時の状勢とを語りて彼れの為に寛を雪ぐんことを誓はる六月四日余大隈伯を早稲田の邸に訪ひ贈位奏請の事を懇請す伯、大に我意を諒とし北畠男の語る所に據り事蹟明確なるを以て其手續を為す可き事を快諾せられしも十月四日伯、桂冠、遂に顧意を達するを得ざりしは大に遺憾とする所なり

大正七年五月三十一日

本間健四郎識

北征日誌（抜萃）　高橋竹仏稿

抵榎井、訪日柳長次郎、燕石其號也、先生引予一室、（中畧）謂予曰北越有傑士長谷川鉄之進、知否、曰不識、又曰本間精一郎知否、曰屈無面識、耳之久矣、聞其殉難、未審其生時、願先生為予詳悉焉、曰精一郎、鉄之進、容貌魁梧、議論風發、各足委方面矣、抑暗殺精一郎也、極為卑劣、有罪則明々可鳴其罪、可刺則明々刺之、既無罪跡之可証、又無刺客之可徵、僕太不堪痛憤、提罇酒、作祭文、躋讃岐富士之絶頂、與同志吊其魂、為恐其冤、（中畧）久留米藩士古松簡二、在傳馬坊獄中、一日語予曰、精一郎之赴鎮西也、與土佐吉村寅太郎、邂逅於馬関、精一郎憂無軍資、謀之寅太、寅太拂囊以投二百金、精一大遊蕩、數日而盡、不齎一金、航海過久留米、與真木泉州平野二郎等、有所協議、蓋二郎入於薩州、精一入於土州、寅太聞精一遊蕩也、切歯曰、咄国賊、以有用之金、為無用之遊、他日相遇、必付吾一撃、当是時、土佐藩論、勤王佐幕、遅疑不決、寅太還郷、則士氣大奮矣、皆精一之所鼓舞也、寅太始服其伎倆云、

裏面白紙

国立公文書館
National Archives of Japan

本間精一郎は我が分系の出にして先考本間源左エ門（十世）の従弟なり
明治年間縣和事より贈位奏請の事を其筋に稟請せるも事蹟
明確ならざるの故を以て死後五十有六年を経たる今日に迫ぶも未だ
恩典に浴するを得ず大正五年五月北畠男爵（大和法隆寺村）事を以て
上京、月の廿五日、余、男に面して精一郎の事を問ふ、男、當時の状況を語
る頗る詳かなり又其親友たること分族手岡忠夫が役れの薫陶を受けたりその
故を以て首相大隈伯に親しく役れの経歴と當時の状勢とを語りて役れの
為に寃を雪ぐんことを誓はる六月四日余大隈伯を早稲田の邸に訪ひ贈
位奏請の事を懇請す伯、大に我意を諒とし北畠男の語る所に據
り事蹟明確なるを以て其手續を為す可き事を快諾せられしも十月四日
伯、桂冠、遂に願意を達するを得ざりしは大に遺憾とする所なり

大正七年五月三十一日　　本間健四郎識

0000 0891

国立公文書館
National Archives of Japan